

書評

濱下武志 著

華僑・華人と中華網

移民・交易・送金ネットワークの構造と展開

岩波書店、2013年11月、346頁

定価 5,500円＋税

ISBN 9784000259293

村上 衛

京都大学人文科学研究所 准教授

1980年代に著者の濱下武志氏が川勝平太・杉原薫氏らと提起したアジア交易圏論は、日本の経済史研究を大きく転換させた。中国経済史研究も近代の開港場研究を中心に進展、華人商人の果たした役割も注目されるようになり[村上 2012: 20-22]、評者もその大きな流れの末端を歩んできた。本書はこのように学界を大きく転換させてきた著者がこれまで進めてきた3つの領域、すなわち「朝貢システム」・「海域アジア」・「華僑ネットワーク」のうち「華僑ネットワーク」研究の区切りとなるものと自ら述べている著作であり(331頁)、1970年代後半から2010年代初めまでのおよそ30年間の調査の過程で発表した論文(各論文の初出は1984年～2010年)を収めている。以下、本書の内容を紹介したい。

序章「アジア研究のなかの華僑研究」はアジア研究の中で華僑研究の方法論を示す。まず、従来の国民経済の考え方に対して、グローバリゼーションとローカリゼーションの進展の中で国家を超える広域経済の視点が重要になってきているとする。そして歴史的に形成されたアジアの広域経済とそれを担う華僑ネットワークに注目し、かかる華僑ネットワークの議論を金融問題と結びつけて議論していく必要があると指摘している。

総論「華僑・華人のアイデンティティ」は、移民第一世代の減少と第二世代の「華人」の増加や

第三世代「華裔」の増大によって華僑の実態が次第に減少しつつあるものの、福建・広東からの移民圧力、華僑の帰属意識の変化、華僑の世代循環による「華僑新世代」の登場、香港における新たな移民増大といった「華僑の状況」が増大し、それに対応した研究が現代中国研究に寄与するとみなす。そして、同郷結合・同郷意識と社会倫理に注目し、前者については同郷会館、後者については功過格を例に挙げつつ、研究の方向性を呈示する。

第1章「華僑・華人ネットワークの特質——インド系と華人系の比較から」は、グローバル化により非公式の領域が拡大する中で、新たな社会的つながりを展望するためにネットワーク概念を用いるとする。具体的には華人系とインド系の移民ネットワークについて金融面を中心にシンガポールと香港について検討したうえで、ネットワークの様々なモデルを示している。

第2章「移民と商業ネットワーク——潮州グループのタイ移民の事例から」は19世紀末から20世紀にかけてタイにおける華人社会の特徴と移民元との関係を、広東省潮州を中心に検討する。まず、暹羅米貿易における潮州人の役割の増大とタイにおける業種や同業組織を示したうえで、潮州における移民数と人口構成、汕頭の商号、華僑送金機関(批業)の発達について検討している。

第3章「華僑経済と民間金融——資金の内部流通と外部ネットワーク」では、シンガポール・マレーシアにおける伝統的華人社会の庶民金融問題・年中行事・文化活動などの諸関係を把握することを目的として、当該社会の資金吸収ならびに資金流通問題を概観するとし、特に資金調達と投資を行うための標会と義会について詳しく紹介し、その社会的な機能を示す。次いで合股・聯号・合会など伝統的金融を紹介する。さらに華僑送金についてその送金の具体的手続きや銀信局の為替送金の多様な方法を示し、民間金融が、為替市場・金銀市場・商品市場などにまたがった金融市場を形成し、銀行などの組織的・制度的な金融機構と相互に関連すること

で、華僑・華人経済にとどまらない市場空間を作り出していたとみなす。

第4章「朝貢システムのなかの商業移民——19世紀後半の朝鮮をめぐる華僑の金融ネットワーク」は日・韓・清の経済関係を、東シナ海をめぐる開港場間の地域間関係、地域間ネットワークとしてとらえ、商業・流通・金融の観点から分析するとし、中朝水陸通商章程締結以降の朝鮮への華商進出と彼らの日本商人に対する優位を開港場貿易の貿易品や金融の条件から説明し、さらには山西票号に代表される歴史的な中国商人の金融ネットワークの役割を強調する。

第5章「帝国＝植民地関係のなかの華僑——1930-40年代日本の南洋経済政策」は、戦前の日本による華僑調査について政治・経済面を中心に検討し、戦前期の華僑・華人問題文献の出版点数と南方軍政との関係を示したうえで、台湾総督府などの「南方派」、満鉄・興亜院などの「北方派」、東亜研究所・外務省がそれぞれ異なる方法と目的をもって華僑調査を行ったとみなす。そのうえで、こうした研究は「翻訳を通じた情報収集」に多分に依存して「事情調査」の枠にとどまり、研究の特徴は政策主導・短期速成・外国依存・非現地的・自己機関中心であって、戦後に引き継がれる調査の方法や内容は多くないとみなす。

第6章「香港－シンガポール関係と移民送金ネットワーク」は歴史的なアジアへの銀流入とアジア市場の存在を強調する。そして、潮州－香港－シンガポール間の商業ネットワークから東南アジアから香港・中国への資金の流れを指摘し、そこに香港上海銀行などの国際銀行が参入したと考える。さらに香港の複合的後背地関係の形成を示したうえで、最後にシンガポールの重要性を改めて呈示する。

第7章「改革開放経済のなかの「華僑的状況」——地域社会の流動と華南の華僑資本」は一転して現代中国を対象とし、郷鎮企業と小城镇に着目する。そこで1980年代半ば頃の郷鎮企業を数値的に把握したうえで、郷鎮企業の関連政策、郷鎮企業と税収・地域経済モデル・集鎮建設との

関連が紹介され、最後に郷鎮企業をめぐる問題が示される。

第8章「華僑・華人・Chineseの国際移動と華人世界」はChineseの国際移動を歴史的に概観し、それを生み出した朝貢秩序などの「上位地域秩序」の歴史的展開を示す。さらに、グローバリゼーションの進展の中でネットワークが形成する地域間関係の検討が重要であるとし、その例として華僑送金のネットワークを取り上げる。

第9章「華僑・華人研究の現在——グローバルとローカルの間では(A)世界的規模での新移民の増大、(B)中国の対外経済関係の新段階の中でヒトの移動が東南アジア以外に向かっていること、(C)グローバル化の中で、華僑・華人を対象を設定するよりも、世界的な移民の中のある部分としての行動分析が必要になっていることへの対応を求めている。そして今後の問題としてアメリカ問題、帰化・国籍問題などを挙げている。

終章「中華網の歴史サイクル——華僑・華人問題からみた地域主義と中華性」は現状の中で国家や民族など従来の概念を越える視点として地域論・地域研究、ネットワーク研究、海域・海国研究を挙げ、そのほか論ずるべき点として1997年香港返還問題、中華民族のような大民族主義と「上海人」などの小民族主義、東アジアの歴史的な国家形成の契機となる3つの時期、非公式のチャンネルを挙げている。

以上の要旨が示すように、本書の大半はグローバルな変化に伴う華僑・華人の新動向への研究の対応の必要性を強調し、香港－シンガポール間の金融ネットワークを例として新たな方法論を呈示することにあてられている。特に、現状を強く意識して研究史整理からの発想にとどまらない点は、通常の歴史研究者にはない特徴をもつ。そして、こうした現状の的確な把握および華僑・華人研究の現状の様々な側面をとらえている点は、絶えず東アジアを中心とする世界各地の諸都市をめぐる研究・発信・交流を行っているネットワーク型の研究者である著者の強みが十分生かされているといえよう。

また、史料の点では、第3章が断然興味深い。

華僑送金の具体的な手続き・為替送金の方法は、現地調査の成果がよく示されており、ここは続編がほしいところである。

一方、本書は問題提起を主眼とするため、細かい実証面では問題が多々みられる。全体的に視野が広いために超時代的な記述が多いが、根拠の多くが断片的な史料で、1930年代以降の史料の使用も多く、実証できていない部分は多い。例えば第4章で19世紀末の山西票号の役割について、支店網が1906年に朝鮮・日本に延長された後の記述、特に1936年の聞き取り調査を根拠としているが、より慎重な検討が必要であろう。

また、いくつか気になる記述はある。例えば潮州グループは歴史的には「福潮行」として16世紀以降の沿海貿易や東南アジア貿易を担い(34頁)とあるが、そもそも広州の福潮行は広州に来る福建・潮州船に対応した取引・徴税組織であり[岡本 1999: 130-143]、潮州グループに限定されない。また、17-19世紀の移民の本国送金はイギリスを中心とした帝國的植民地経済の中で行われた(56頁)とあるが、帝国主義植民地経済が浸透するのは19世紀以降であろう。

このほかデータの扱いも気になる。例えば表2-3(99頁)にみられる潮州の海外移民についての1912~1923年の数値は、より正確な移民の数量研究[藤村 1995・杉原 1996]を用いるのが適切であろう。

もっとも著者の狙いは、細かい実証ではなく、既存の議論を打破して新たな方向性を示すことである。著者の長年にわたる研究促進の影響もあって、日本の華僑・華人史研究も研究が蓄積されつつある。以下では、本書で著者があまり触れていないが、著者の論点と深く関わる近年の歴史研究を取り上げて研究の現状を示すとともに、日本における今後の華僑・華人史研究の課題の一端を呈示してみたい。

本書は著者のこれまでの著作[濱下 1990・1997]に基づき「朝貢」「朝貢秩序」が前提となって議論が進められてきている。濱下氏の「朝貢」に関する議論が既存の経済史研究や近代史研究のあり方に対する批判であったために、日本の

中国史研究の側からの反応が少なく、その概念も用いられてこなかった。しかし近年になって岩井茂樹氏が明代の朝貢を重視する朝貢一元体制に対して、清代の朝貢に拘泥せず、開放的な海上交易を行った「互市」の制度という議論を提起し[岩井 2009]、濱下氏の議論をより精緻にしつつ、「朝貢」の語よりも理解しやすいイメージを提供しつつある。今後は、かかる議論を深めていくことが必要であると同時に、著者の意図を十分理解しないで「朝貢システム」といった表現に安易に依拠することにも、より慎重にあるべきだろう。

第4章にみられる、中国・朝鮮・日本をめぐる関係については格段に研究が進んだ。中国・朝鮮の関係は岡本隆司氏が外交史の側から、1880年代から日清戦争前までの清韓関係を丁寧に解きほぐした[岡本 2004]。経済史の側面からは石川亮太氏が本書にも登場する朝鮮華商同順泰の文書をはじめとする多様な史料を用いて流通・金融面を中心に分析を進め、華人商人が日本の銀行を利用してビジネスを拡大する実態についても明らかにした[石川 2016]。こうした朝鮮華商の行動を、中国内を含む他の地域の華商と比較して位置づけていくことが望まれる。

第9章で取り上げられた国籍問題は、清末の福建省南部においてイギリス籍を主張して不平等条約特権を利用しようとする華人の問題が検討されてきた[村上 2013: 228-256, 389-446]。また、これに対応する東南アジアにおけるイギリス籍華人の保護問題も議論されている[篠崎 2008]。今後は、地域的にはイギリス以外の植民地、時代的には20世紀前半にも広げ、現代とつなげていくような議論が必要となってきた。

著者が検討してきた、香港-シンガポールを基軸とするネットワークについては、香港については華人の金融活動に焦点をあてた久末亮一氏の研究がある[久末 2012]。しかし、東南アジアとの金融ネットワークについては残されている課題は多い。シンガポールについても、貿易に関しては杉原薫氏の19世紀末以降のアジア間貿易の研究[杉原 1996]以来、停滞しており、

近年19世紀前半の検討が行われるようになったが[小林 2012]、外国銀行と在来金融機関の双方を視野に入れた金融ネットワークの研究はあまり深化していない。

以上の研究が示すように、著者が批判してきた国家の枠をのりこえた研究はもはや常識となっているものの、華僑・華人研究において歴史学的に十分深められていない領域は多い。1930年代以降の史料や、現地調査に基づく限り、20世紀初頭以前を対象とする、前近代からの長期的見通しをもった研究が不足するのは当然である。しかし現在、少なくとも香港やシンガポール、そして旧東南アジア植民地に関連して、19世紀から20世紀初頭について公開されている一次史料は多く、アクセスも非常に容易になっている。著者の議論に啓発されつつも、一層精緻な実証研究から著者の議論の再検討を進めていくとともに、確かな地盤をもって現状を分析する研究者との対話を試みていくことが、評者も含む後進の歴史研究者の課題であるといえよう。

以上、中国近代史研究に足場を置く評者の関心に基づいて評してきた。本書に含まれる大半の文章が対象とする読者は歴史研究者ではないため、的外れな点も多いと思うが、ご容赦いただきたい。

なお、本書の日本語は極めて難解であり、重複した内容・表現も多い。索引・文献目録がないのも残念である。研究書の質の底上げのために、出版社側の一層の努力を期待したい。

引用文献

- 石川亮太 (2016)『近代アジア市場と朝鮮——開港・華商・帝国』名古屋大学出版会
- 岩井茂樹 (2009)「帝国と互市——16-18世紀東アジアの通交」籠谷直人・脇村孝平編『帝国とアジア・ネットワーク』世界思想社
- 岡本隆司 (1999)『近代中国と海関』名古屋大学出版会
- 岡本隆司 (2004)『属国と自主のあいだ——近代清韓関係と東アジアの命運』名古屋大学出版会
- 小林篤史 (2012)「19世紀前半における東南アジア

域内交易の成長——シンガポール・仲介商人の役割」『社会経済史学』78-3

- 篠崎香織 (2008)「海峡植民地の華人とイギリス国籍——権利の正当な行使と濫用をめぐるせめぎあいの諸相」『華僑華人研究』5
- 杉原薫 (1996)『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房
- 濱下武志 (1990)『近代中国の国際的契機』東京大学出版会
- 濱下武志 (1997)『朝貢システムと近代アジア』岩波書店
- 久末亮一 (2012)『香港「帝国の時代」のゲートウェイ』名古屋大学出版会
- 藤村是清 (1995)「中国南部四港における出入国者数の推移 (1855-1939年)——海関旅客統計を中心にした基礎的数値とグラフ」『研究論集 (神奈川大学大学院経済学研究科)』24号
- 村上衛 (2012)「清末の沿海経済史」久保亨編『中国経済史入門』東京大学出版会
- 村上衛 (2013)『海の近代中国——福建人の活動とイギリス・清朝』名古屋大学出版会